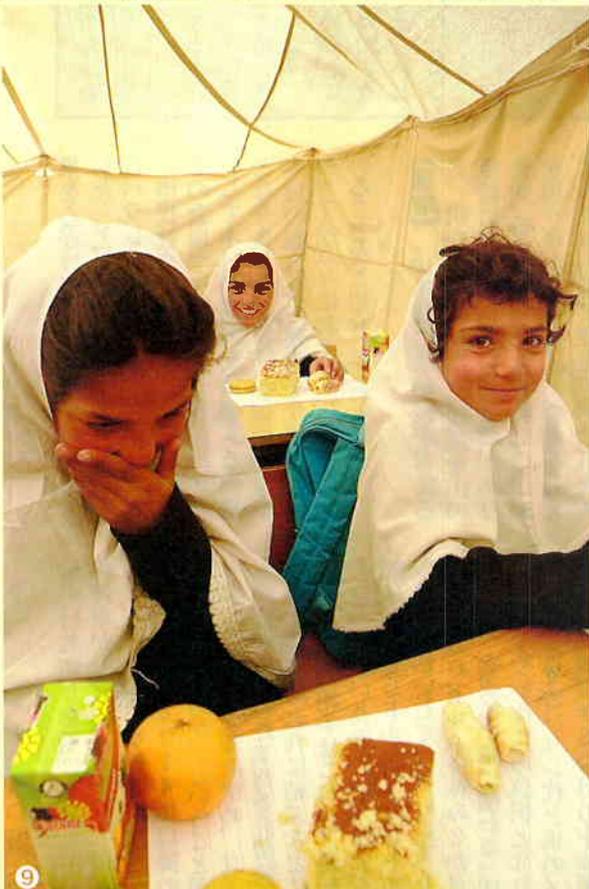
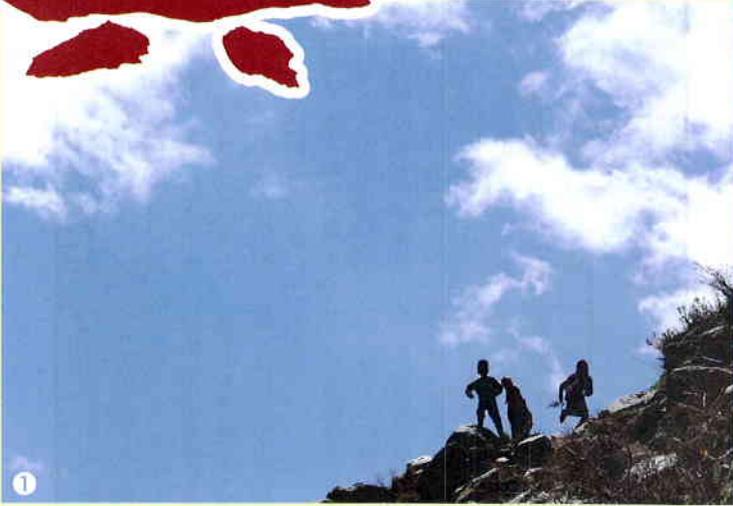


翼・ぼあーる 山の学校

第9回 総会&現地報告会 大阪・現地報告会

《別紙》第9回総会資料



①学校が終わると放牧の手伝いが始まる ②川辺で遊ぶわんぱくたち ③朝、手をつないで学校(左下)に向かう生徒たち ④ゼロ年生。オブザーバーとして学校に通い始めたソーミヤ ⑤マトリョーシカ人形のようなアスラム家の姉妹。左からナフィサ、マジャミン、ナスミア、ソーミヤ ⑥黒板に字を書く2年生(手前はショーイディーン) ⑦台所でお母さんに頭を洗ってもらうナスミア(2年生) ⑧学校前に並んでくれた山の学校の生徒たち ⑨3年生のテント教室での交流会。カブールのパンケーキやオレンジにうれしそう ⑩窓辺に座ったサミール(左)とマジャミン ⑪家で、おどけた表情で踊りを披露してくれるカティープ ⑫台所で湯を沸かす、故サブダル校長の長女ファトナ



今年の司会は佐々木・大守の紅白コンビ

第九回総会

総会

2004年春に発足し10年間を目標に活動してきた当会ですが、その活動期間も残すところおおよそ一年半となりました。我々の今後の活動にアフガニスタンへの思いを重ねた長倉代表の挨拶で、今年の総会は幕を開けました。

今年で総会も9回目となりました。発足当初は、10年後には復興が進み、支援がなくなるとも学校も国も一人歩きできるだろうと思っていました。ところが、現実のアフガニスタンはいい

第9回総会&現地報告会

10月8日(月)武蔵野芸能劇場にて開催。今回は会員・一般合わせて100名の方々に参加いただきました。

2012年も残すところわずか、皆様、いかがお過ごしでしょうか。

秋恒例の総会と現地報告会は、10月8日、東京・武蔵野芸能劇場にて100名の参加者を集め、無事に終了することができました。今年是在日アフガン女性の江藤セデカさんに、「アフガニスタン女性の実情」をテーマに講演をお願いしました。「女性は何もできない存在」と言い切るタリバンの幹部に、働く女性の立場から反論したこともあるというセデカさん。「女性への抑圧はイスラム教の教えに依るものではなく、『女性は男性の所有物』と考える古くからの因習によるもの」と体験をもとにわかりやすく話してくださいました。

その講演の翌日、アフガニスタンと接するパキスタン西部のスワットで、15歳の女子学生マララさんがパキスタン・タリバン運動のメンバーに銃で頭を撃たれるという衝撃的なニュースが伝えられました。女性が教育を受けられるように訴えたことが、その襲撃

の理由でしたが、女性が学ぶことはイスラムでも認められていますし、何よりも、人間としての権利だと思

います。私たちが支援する「山の学校」。ここでは、子どもたちが男女の境なく同じ教室で勉強しています。その姿は、私たちが思い描くアフガニスタンの未来と重なり

ます。会の活動はまもなく10年目に入ります。最終年となる2013年秋の総会・報告会には、今まで参加することができなかった方々にもぜひ、参加してほしいと思っています。子どもたちの姿を心に刻み込んでほしいと願うからです。

来るべき年が、皆様、そして世界の人のひとにとって「より良き一年」となることを祈っております。

長倉洋海

状態ではありません。その一方で、ほんの少しずつですが山の生活はよくなっています。そして行くたびに子どもたちの笑顔を見られること、そこに希望を感じています。それがアフガニスタン全土に広がっていつてほしい。子どもたちは辛いことがいっぱいある中で生きているでしょう。しかしそれは、10年後20年後、彼らが大人になったときには、このあり様を変えようという原動力になつていくと私は確信しています。予定とした活動期間の10年を過ぎた後のことは、今討論を重ねており、資金が続くかぎり、できる範囲で継続したいと考えています。

続いて、副代表の比留川より、国内及び現地での活動報告をいたしました。

【国内】アフガニスタン関連のイベントにはできるだけ参加し、情報収

集を心がけています。7月に開催された「アフガニスタン東京会合CSOパレルイベント」アフガニスタン市民社会を迎えて」にも参加し、その会場で江藤セデカさんにお会いして本日の講演を依頼する契機となりました。また、会報の発送や本日の報告会の運営をサポートするタツフの方々にお手伝いいただいたことをご紹介しておきます。

【現地】10年間の活動後を考える。現在会で担っている役割を山の学校に引き渡していく必要がある。そのひとつに女性教師の送迎を担う車があり、今後の管理を考えると6月16日付で送迎業務委託契約を結び売却しました(詳細は会計報告参照)。サファダル基金について、校長の遺族の生活が困窮していたため、乳牛(母子)を購入。この基金の管理も責任を持って行なっています。

【活動計画】内容はこれまでと変わりはありません。2014年春以降の方向性については月1回の運営委員会でも今後議論を重ね、財源が続くかぎり支援を続けたいと考えておりますので、皆様のご協力を引き続きお願いしたいと思います。

次に会計担当の森より、会計報告をいたしました。

【会計】これまでと同様に国内活動費については、当会の事業活動収入(ポストカード・書籍売上等)でまかない、会費・寄付はできる限り現地活動にあてています。教師の給与と支援については、物価がさらに上昇し生活が厳しさを増したことから昨年度は月10ドルずつ増額しました。車の委託契約の背景には、フランスのNGOによる女子高生送

迎の打ち切りを受けて探していた代替車が見つからないこと、現在山の学校で所有し女性教師の送迎をしている車の2014年以降の所有はどうなるのか、ということがありました。車の売却を決め、女子高生の送迎も含めた業務委託契約を、車の譲渡契約と共に結ぶことになりました。契約相手はこれまで運転手も兼務していたヤシン先生で売却額は1500ドル、月100ドルずつを分割払いしてもらいます。会費は月1000ドル(冬休み2か月間を除く)を支払い車に関わる一切の経費はヤシン先生の負担となります。これまでガソリン代と車のメンテナンス費用で年8000ドル近くかかっており、妥当な契約内容だと考えています。また、2014年以降の残金予測から、教師の給与・送迎車の支援に絞ればさらに3〜4年は支援を継続できると考えています。子どもたちが山の学校で授業を受けられるよう学校の維持に重きを置き、先生方ができるだけ長く山の学校で働けるように給与と支援を継続することにしました。

スライドトーク

「パイロットになりたい」「医者になって村の人たちを助けたい」という子どもたちの夢に触れました。出会った子たち、再会した子、どの子もそれぞれ夢を持ち未来に向かおうとしていました。訪問を終え、カブルに戻る途中、ブドウ畑で働く人々や美しく咲く野生のチューリップを目にして、「アフガニスタンの平和」を実感していたとき、カブルで戦闘が始まったことを知りました。いまだにアフガニスタンのなかで戦乱が止まないというのは、第一

に周辺国の介入がありますが、同時に大人たちにも責任があると思います。自分たちの欲望、地位、お金や権力、そういったもののために戦いを起こしている人たちがいるのは事実です。日本で大震災が起こったときにも感じたことですが、大人は簡単に変わらないんだと思います。東日本の震災直後に財界人や政府、そしてメディアも「絆」「新しい日本」などといったのが、1年半経つてみると、「元の日本」に戻そうとする人がなんと多いことか。大人というのは一度、染まってしまうとなかなか新しい方向に軌道を修正するのは難しいのだなあとと思います。それはきつとアフガニスタンでも同じで、ある思考の中で生きてきてしまった人たちは、口では「平和を」といいながら容易にはそれを実現できないのではないのではないか。しかし、そこで簡単にあきらめてしまうのではなく、子どもたちに目を転じることで希望が生まれます。アフガニスタンの子ども、東北の子ども、「人に助けられて生きていく」「助けられたから、自分も人を助けられるような人になりたい」という気持ちを持つていく。こんな子どもたちが大人になったときにきつと変わっていくと思えます。それが、私が持つていく未来への希望です。

人にはさまざまな考え方があり、価値観も異なっています。それらの価値観をすべて生かしていくとしたら、結局いまのままで行くしかないじゃないかということになってしまいます。では、どうするのか。私たちが大地の上で生かされているという当たり前のことを再認識するしかない。その大地は実は繊細で有限

だという視点を共に持つことで、それぞれに価値観の違いを乗り越えていかなければならないと思えます。来年度のJVCのカレンダーのタイトルを「大地にうたう」としたのですが、それは私が撮ってきた子どもたちの、どの写真にも大地が写っているんです。「大地に生かされ、大地に感謝して生きていく」というイメージからできたタイトルです。自然に近く生きていくということとは、厳しい生活ということでもありません。生活は大変だけれど、子どもたちはとてもとてもいい表情で生きているように思いました。

江藤セデカ氏 講演会

「私のアフガニスタン～アフガン女性の視点から」

文/大守 裕

今年、スペシャルゲストとして、アフガニスタン出身でNPO「イーグル・アフガン復興協会」の理事長でもある江藤セデカ氏をお招きし、過去、現在、未来のアフガニスタンから女性の視点からお話していただきました。生まれてから大学を出るまでを、ずっとアフガニスタンで暮らしていたその経験を下敷きとする独特の語り口からは、日本の新聞やテレビを通してでは伝わってこないような、そこに生きる人々の暮らしそのものを感じ取ることができました。

セデカ氏は自身の幼少時代を振り返り、中学校にあがる前から結婚の意味も理解しないまま友人たちが婚約、結婚させられ、自分とは別の学校に転校していったことにふれ、当時から女性がいかに軽んじて見られていたかということ、また男女共学がいかに大切かということについて意見を述べられていました。当時の女の子たちの中では、「男性は女性を食べる生き物である」かのような妄想まで広まっていたとセデカ氏は指摘。まずお互いをよく知ることから始めるのが大切なのではないかという意見です。男女が幼少期に一緒に机をならべて、初めて一緒に仕事ができるようになるというセデカ氏の意見は、中高を男子校で過ごした筆者にとって大変共感できる部分でしたし、と同時に、いまだに女性の人権をないがしろにする人間が少なからず存在するのも、結局は幼少期の男子校で教えられた男尊女卑の思想にその原因を見出せるのではないかと思います。

男女共学という日本では当たり前のシステムが、アフガニスタンではとても希少なことで、さらにそれを大人になった現代のアフガニスタン女性が希望しているのを知ることにつけ、パンシールの人々が選択した「共学」というシステムがいかに大切なものなのか、再確認することができました。そしてそのシステムの存続を後押しするという意味でも、私たち「山の学校支援の会」の活動には大切な意味があるんだらうと思います。

現在のセデカ氏は、学校にトイレを作る活動をしているそうです。アフガニスタン国内の学校では、学校内に清潔なトイレがない場合も多く、女の子がトイレを我慢してしまい、結果として膀胱炎になるという子が何人もいるとのことでした。山の学校でもいかにして女子学生が通いやすい学校をつくるか、昨年からは始めた高等学校への通学支援もその一つだと思いますが、できることから少しずつでも改善をしていくということに、目に見える以上の意味がありそうです。

江藤セデカさん、お忙しい中どうもありがとうございました。

大阪 現地報告会レポート
10月13日(土)高槻現代劇場 文化ホール 展示室にて開催。54名の方々が参加してくださいました。

現地報告会は長倉代表のスライドトークから始まり、今年4月の現地訪問の際に撮られた写真を上映しながら、山の学校やアフガニスタンについての報告がありました。

スライドに映し出される子どもたちは、現地訪問の際の恒例となった成績優秀者への表彰で表彰される子や、喜んであげていたり、用意したイベントの「長縄跳び」「一人三脚」に楽しそうに興じる姿あり、家のお手伝いで家畜の世話をしている様子など、どれも生き生きとしていました。

参加者からの質問のコーナーでは、「大人に向けて、どうしていけばよいか」と言をお願いします」との問いがあり、「人々が共に生きる」ということには、いろいろな人がいて難しい。「大地と生きる」ということを考えて生きていけばよいのではないかと、の長倉代表の回答に、みなさん頷かれていたようです。

スライドトーク終了後は、アフガニスタンと現地訪問の際に買求めたアフガニスタンのドライフルーツやナッツを食しながらの交流会と同時に、東京での総会の際に行なわれた、アフガニスタン出身の江藤セデカさんの講演「私のアフガニスタン」アフガン女性の視点から」が上映されました。

アフガン女性の講演を聞ける貴重な機会なので、多くの参加者が熱心に目を見つめておられました。

会場内には現地訪問の際に撮影した写真パネルのほかに、子どもたちにカメラを渡して撮ってきたもらった家族の素の表情をなかなか

上手に撮った写真も展示されていました。

残念ながら今年は昨年より参加者が少し減ってしまいましたが、いよいよ来年は発足10年目の節目となる年です。会の今後の活動についてのこともありますので、できるだけ多くの方に参加していただきたいです。(文/雨堤秀美)



大阪/ワールで話もはずみず

アンケート

《総会》

初めて参加しました。会の内容があまりわからず会員になっていましたが、今日は出席し良かったです。

《現地報告会スライドトーク》

子どもたちが学校に行くのを楽しみにしていること、日々の家の手伝いも頑張っている様子が伝わってきました。厳しい自然の中で、(子どもたちの)将来の夢が「人の役に立つこと」というお話が印象に残りました。(一般参加)

長倉代表の気持ちのこもったお話に毎回心を打たれます。子どもたち一人ひとりの名前、背景までよく覚えていらして気持ちのこもった支援の形を感じます。

長倉代表が「大地と共に生きる」とおっしゃった言葉がとても印象的で、(日本では)便利なものに慣れてきてしまっただけの昔の生活には戻れないし、未来の子どもたちに何が残せるだろう...ととても考えさせられました。大地と生きることがかけ離れているからだと思います。(一般参加)

《講演会》

かつてのカプールの様子は初めてうかがいました。セデカさんの生き方にも共感します。一方、まだ女性のおかれた状況が大変厳しく、物理的に虐待もたくさんあることにショックを受けました。(一般参加)

《支援の会活動》

毎年訪問されて見守っていることを伝えることは彼ら(山の学校)の子どもたち、親、教師にとって大きな意味を持っていると思えます。現地の方々と向き合えるのも強み、誇りに思います。教育が子どもたちの生きる力につながり、平和な社会をつくる行けるのではないかと思います。男女一緒に学ぶことが難しいアフガニスタンで共学であるのもすばらしいですね。(一般参加)

交流会フォトギャラリー



大阪では広いスペースを活かした展示ができ、来場された方々が一点一点の写真の中の子どもの様子やアフガニスタンの生活・風景と静かにゆったりと対峙されている様子が見られました。小さなお子さん連れのご家族の姿も(その場に漂う何か温かな空気に惹かれ思わず一枚バチリ)。

お茶うけのアフガニスタンからのドライフルーツに今年はいちぢくと黒っぽいブドウのレーズンが加わり「おいしい!」という声が上がっていました。いちぢくは日本で目にするコロッと丸いものではなく、中心を上下に貫いてわら紐に通されペタンコのドーナツ状に干しあがっています。



東京は抽選に漏れて展示交流会用いつもの小ホールが借りられず、「楽屋」を会場に展示・交流会を行いました。普段は役者さんの身支度などに使われる鏡前のカウンターに写真パネルを展示。ライトが山の学校の子どもの家に灯る明かりを連想させる柔らかな光で写真を照らしていました(今年の山の学校の家庭訪問時、夜暗くなるとになると家々に電気が届くようになっていました)。ごちんまりとしたスペースですが、人と人との距離がさらに縮まって和気あいあいとした雰囲気。今回講演していただいた江藤セデカさんに熱心に質問される方の姿も見られました。



子どもたち撮影の写真のコラージュにして展示。家族を撮る子、自分を兄弟姉妹たちに撮らせる子、家族同然のような家畜を撮る子、空や風景を写真に収める子...と様々ですが、長倉代表の撮る写真を見ている影響が昔々なかの腕前です。いつかこの中から、「将来の夢は?」の問いに「カメラマン!」と答える子が出てくるかもしれません。

広がれ! パネル展のわ

今村学園高槻幼稚園
ひなぎく祭での写真展

11月3日青空のきれいな秋の日、幼稚園は活気に満ち溢れていました。
山の学校の写真展のお部屋は一日中ほっこりする空間になっていて、大人も子どもも写真を見たり本を読んだりレーズンをつまんだり...おしゃべりも弾んでいました。《カンパ3164円》
(文/辻内奈穂美 写真/林正規)



みんな大集合!!
来年は最後の総会だよ

《長倉洋海最近&今後の活動》

◆スライド&トーク

日時: 2013年1月11日(金)

19:00 ~ 21:45

場所: Liaison(リエゾン) 東京渋谷の東急ハンス近く
www.liaison-cafe.com

会費: 2500円 (弁当・ドリンク付き)

電話: 03-6416-1635 (要予約、定員25名)

長倉洋海撮影

JVC国際協力カレンダー2013

「大地にうたう」好評発売中!!

カレンダーは壁掛け1500円、卓上1200円の2種類で、会報の表紙を飾った写真も入っています。また今回は、カレンダーに使用されている写真のポストカードセット(6枚500円)もごさいいます。収益の一部は当会に協賛金として還元されますので、どうぞお買い求めください。



事務局から

●山の学校の会支援申し込みチラシをリニューアルいたしました。一部同封いたしますのでご利用いただけましたら幸いです。なお、さらに必要でしたらお送りいたしますので事務局にご連絡ください。

●2012年度分会費未納の方に郵便振替用紙を同封させていただきましたので、納入をお願いいたします。残額は封筒宛名ラベル下段の数字で表示しています。なお、会費残額を一括納入されてもかまいません。

●不要切手、書き損じはがきのご提供をありがとうございます。大変助かっております。引き続きご協力をどうぞよろしくお願いいたします。引き続き住所変更の場合はお手数ですが事務局にご連絡をお願いいたします。

アフガニスタンの学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、ペンシルベニア州の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。

〒187-0032 東京都小平市小川町 1-1071-15 比留川 気付
FAX & 留守番電話: 042-345-7805 E-mail: info@yamanoagakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanoagakko
郵便振替口座: 00160-1-667404
編集: 天野みか 岩崎 大守 佐々木 水間 貞紀
発行: 近藤 理恵 ナチン ● 浅井 充志 印刷: 藤田印刷 (株)